研 究 課 題	中国王朝正統論
研究代表者	大 久 保 秀 造（文学研究科博士後期課程史学専攻）

①　研究の目的

本研究の目的は魏晋南北朝時代における各王朝の興亡にまつわる事象について着目し、王朝交代時の政治的動静・社会状況・礼制儀礼を含む史書の記述から王朝の正統継承について検証考察することである。三国から南北朝にかけて中国は大規模な分裂時代であり、とくに南北朝では漢族と非漢族の王朝が並立するという特異な時代とされる。従来の研究では三国では魏、東晋・五胡十六国では東晋、南北朝では南朝に正統が継承されたとしてきたとされる。漢族の政治制度・儀礼を継承したという視点であればある程度正解といえるが、この理論は東晋・五胡十六国に適応可能なもので、三国は漢族内抗争であるため該当せず、南北朝は民族の違いはあれ北朝で政治制度と礼制を整備するため漢族の制度を採り入れ、胡族の制度と併用していることから政治制度と礼制に拠ったこの理論では不十分であり、それらも正統を検証考察するための手段の１つと考える。礼制儀礼面においては王朝交代時にみられる禅譲に至るまでの儀礼、軍事政治面での官職の変遷、王朝交代関係者の功績を基に検証考察する。これらは全て史書の記述に基づいて考えるが、王朝創設者の特異な出生・身体的特徴、出生の経緯、王朝成立までの過程についての記述、反対に王朝最後の人物の記述など残された史書はある一定の同じサイクルを持っている。史書の持つこれらの特徴が意味するのは史書そのものが後代の王朝によって編纂されたという事実。歴史書を編纂することは国家の一大プロジェクトであるが、創設者の偉大性と王朝を亡ぼす原因となった人物の無能さを誇張している点は否めない。そうしなければ王朝交代というプロセスが単なる武力簒奪でしかなく、次代王朝が先代王朝から受け継いだ正統は断絶し存在しないことになり、それは王朝交代の当事者達だけでなく、それに付随する人々の立場が無くなる。新たな秩序構成にはそれで良いかもしれないが、魏晋南北朝時代での儒学に基づいた国家観を有する漢人にとってそれは認められないことである。王朝交代には理由が存在しそれが天命という形で下され王朝は有徳者によって引き継がれるとする儒学では史書は単なる史実の記録だけでなく、教化の意味合いを含んだ教訓書でもある。それらについても史書編纂の過程とそれに関わった人々の記録から検証し、史書の持つ内実を見極める必要がある。正統を研究する上で、史書の真実性を確認するのは時代を遡るほどに困難を極める。残された史書と散逸した文献の引用部位などを引き合いに幾多の史書編纂・改編を乗り越えて今日に伝わる歴史書から、正統が如何なるものであったかまた継承されてきたかを明らかにできれば、歴史判断の基準となり意義あることだと考えている。

②　研究の経過

これまでの研究の経過であるが、私が初めてこの問題に取り組んだのは学部３年の後半からであり、まずは卒論で簡略ながら各王朝の理解と時代背景、それらの交代についての流れをおさえ、三国期における各王権の後漢からの継承経緯・正史における記述の差異と順位づけ・それぞれの主張する立場の整合性について考察、さらに南北朝における各王朝の理解を南北に分けて考え交代の流れをおさえ、史書の記述から南北がお互いをどのように認識していたか、各王朝の創設者の表記の差異について考察し、正統にまつわる字義についてまとめた。続いて修士に入って史書編纂について調査し、専攻内の研究発表にて報告。南北朝期に華北に残留した漢人の動静について史書記述の洗い出しを行い、先行研究の指摘と重ねながら華北における時代区分を自分で前期・中期・後期に分け、それぞれの時代に漢人の北朝への仕官姿勢を対比しながら南朝との関係を検証。南朝に対する周辺勢力の動静についても考察し、史書編纂の過程を成立年代と照らしながらその成立と時代背景についてまとめた。また史書編纂に絡んで北魏で起きた筆禍事件を調査し、漢胡の歴史観の相違や漢胡の関係について検証し、史書編纂が政治闘争の具とされたことを突き止めている。卒論でま

とめた内容に加筆・修正を加えて修士在籍中に調べたことを加味し修論を執筆した。その後現在在籍している博士後期課程へ進み、より詳細に禅譲について研究を開始。禅譲の完成形である漢魏革命（漢魏禅譲）を題材としてまずは曹操による献帝庇護から禅譲儀礼が行われるまでの期間の官位の変遷、軍務政務における功績の蓄積を中心に先行研究と史料を対比しながら調査、その後儀礼がいかに行われたかを検証した。その過程で儀式直前の事象・儀式当日の様子・どのようなプロセスから儀式に至り完遂したかを確認した。多くの先行研究は史料本文では簡潔な記述に留まるが、引用史料（本文補足資料、大半が既に散逸した著述による）にて儀式の詳細が事細かで、本文よりも重要視されてきたとされている。しかし簡潔にまとめられた本文中であっても解釈によっては違う意味にとることも可能であることを見極めた。あまりに簡潔すぎて明確な日時の特定が難しいとされることであり、多くの先行研究で２種類の解釈がなされていたのである。日を置かずして儀式が連日行われたことと日を置いて儀式が執り行われたことがそれである。また皇帝即位と天子即位が一括して行われたかそうでないかも研究者によって分かれるところである。それらはまだ検討の余地があると考えている。そして漢魏交代の儀式過程を明らかにしどのようなプロセスで交代がなされたかを検証した。それについては 21 年度学内学術研究発表にて報告し、論旨を大正大学大学院研究論集第 34 号に掲載。ここまでは三国と南北朝について主に研究してきたが、その間の東晋・五胡十六国や南北朝時代黎明期の東晋宋革命（晋宋禅譲）については次項に譲る。主な研究場所であったのは本学研究室･付属図書館（資料収集調査）・他大学図書館（資料収集調査）・国会図書館（論文収集調査）をメインに活動していた。

③　研究の成果

大学院研究助成金を認可された本年は主に大学院研究論集への寄稿論文作成と平成 22 年度 10 月 13 日に開催された学内学術発表の研究報告の作成を中心に研究を進めることになった。１つ目は大学院研究論集第35号に掲載した「東晋元帝の勧進の新研究」である。この研究は禅譲と違い勧進によって王朝を中興した東晋初代皇帝・元帝について取り扱ったものである。そもそも元帝は皇帝の直系血族ではなく傍系にあたり、西晋が盤石な支配体制であれば皇帝となり得る人物ではない。西晋が内乱で疲弊したところに中国の周辺に蟠踞していた異民族が流入・侵攻し、もともと魏や西晋の国策で国内に移住させられた同種族と結託、弱っていた西晋を滅亡させてしまったことが彼を歴史の表舞台に立たせる要因となった。彼は皇族であるゆえに地方王の１人として封爵され中央政権に参画したのであるが皇族・外戚による権力争いに疲れ、側近の助言で封地に難を避けた。直後に皇族同士の覇権争いで内乱状態となり政情不安が起こる。そこで側近の案で江東へ赴くことにした。折しも勢力争いを優位に進めていた叔父にあたる人物が彼を見込んで江東を統治する将軍位を授けて江東を彼に委ねた。当時の江東は孫呉滅亡で西晋に併呑されたものの多くが未開の地として軽んじられていた。その地の豪族たちは共同体のような連携で治安を維持してきたが政情不安によって治安が悪化していた。そこへ皇族である彼が赴任したことは彼ら豪族にとって江東を安定に導くための御旗に見えたことだろう。ただ少人数で赴任してきたことで豪族は不安を覚え当初は様子見を決め込んでいた。そこで活躍したのが王導をはじめとする王氏一門や有力者の子弟であった。王氏一門で江東に権勢を誇った人物に豪族への仲介を頼む、江東出身の名族で中央政界にて繋がりのあった人物を帷幕に招き厚遇などである。これで警戒心を解いた大半の豪族は彼の指揮下に入る。その頃華北では異民族による西晋への攻勢が強まり有力な将軍達は戦死し都が陥落して多くの皇族・家臣は殺され皇帝が拉致されるという一大事が起きる。ただし少数の逃げた人々が亡命政権を一時樹立し西晋壊滅にはならなかったが、数年でこれが滅ぼされ結果西晋は滅亡する。この一大事に生き延びた有力家臣や一握りの皇族は江東の有力者となっていた元帝を中心とした亡命政権支援体制を構築するが亡命政権滅亡で方向転換を余儀なくされる。すなわち元帝を臣下で推戴し皇帝に即位させる勧進が実行されるのである。彼は拉致された皇帝の存命中は頑なに即位を拒否し続けるが､拉致された皇帝が辱められて殺害されるに至り、周りからの数度の説得と百数十名の臣下連名による勧進奉書によって即位を了承。簡単ながらここまで皇帝即位勧進の流れをまとめてみた。ここに勧進による王朝の中興がなったわけであるが、従来の研究では単に彼が皇族故に傍流であろうとも王朝継承者に準ずる限り即位する理由に不足はなく、西晋滅亡という難局を乗り切り晋は存続しているのだと主張する根拠が欲しい有力家臣と自分たちの勢力基盤の安定化を望む地方豪族の思惑の合致で東晋は成立し、それは亡命政権としてまた南朝に正統を引き継ぐための準備政権である

と認識されていた。私はその従来の見解に対し元帝の即位が従来の理由ならば政権崩壊直後に行われるべきことで、時間が空くことは皇帝不在ということを意味し有力家臣の思惑にもそぐわず、即位の意思があっても先代が存命だからと遠慮する必要がないのではないかと考えた。そこで元帝の即位までの記録・軌跡と時代背景・社会情勢・即位に関係した人々・元帝側近集団・周辺勢力の動静という観点からこれを見直し、その実情を明らかにできればやがて王朝の中興者としての立ち位置にいる皇帝即位者と禅譲によって即位した人物との比較、王朝の持つ意義の違いが検討可能であろうと思う。

次に学内学術研究発表で報告した「東晋から宋への禅譲について」である。この研究では東晋から宋への権力移譲の経過を検証し、その禅譲について禅譲の完成形としている漢魏交代の例と比較しその相違点を明らかにした。そこでまず東晋に代わって登場する宋について研究を始めた。東晋からの禅譲によって成立した劉宋と呼ばれるこの王朝は劉裕という人物なのだが、実は素性は貧民の出という経歴の持ち主。10 歳の時までに両親を亡くし、わずかな土地を耕作して生計を立てていたが、成人して軍隊に所属。軍隊の中堅将校として経験を積み、中隊長として賊徒鎮圧に貢献する。東晋末に首都を脅かすような反乱がおき、政情不安の中で有力な貴族が国権を掌握。同等の権力を有していた劉裕の上司を斃し自身が皇帝位を簒奪（形の上ではこれも禅譲）するが支持を得られず、劉裕らによって斃され東晋が復興される。この後も劉裕は軍功を重ね次第に頭角を現し、同僚であり政敵となりつつあった人物を打ち破って政権基盤を掌握。ただし政治面における功績が少なく、その能力にたけた側近や東晋の名族貴族たちにそちらを任せている。東晋を復興してから十数年、劉裕は禅譲によって宋を建国に至る。劉裕の功績は軍事面では比類なきものであったが、政治面では若干劣っていた面は否めず、それが禅譲になかなか踏み出せない要因であったと先行研究でも指摘されている。しかし私は劉裕が政権を掌握したのは不安定な東晋を安定させることのみが目的であって、故に対外的な軍事攻勢に功績が集中したのではないかと考察する。つまり復興させた当初は軍事面で東晋を支えるつもりであったがゆえに十数年の時が経過したのではないかと。実は劉裕が禅譲を受けた恭帝は聡明な人物で、その前の安帝は知的身体障害者であったことが判明し、故に禅譲を迫るなら安帝のほうが事をスムーズに運ぶと考えられる。劉裕らに斃された有力貴族も安帝のこの身体的事情を理由に皇帝位を剥奪し自身で即位しようとした。ならば劉裕自身が皇帝即位を望んでいたと解釈するよりは、劉裕の側近集団と東晋の有力貴族集団によって次代の皇帝とされたと考える。さて東晋宋交代と漢魏交代を比較した場合、幾つかの相違点がある。特に注目したのは禅譲によって交代した前王朝の最後の皇帝（皇族に連なる人物）が弑逆されること。これは南北朝を通じて慣例のような形で南朝北朝両者に見受けられ、場合によっては皇帝交代のたびに先代の血縁者は皆殺しにされるほどの悲惨さを極める。それまでの禅譲では漢魏・魏晋の際も先代の最後の人物は寿命を全うしており、明確に殺害の記述があるのは東晋恭帝が初めてである。有能な人物であり誰かに御旗として担がれればかつての東晋復興と同じことが起き新生王朝の劉宋が傾くとの判断とされている。これによって禅譲儀礼の認識が変化してきていることが理解できた。以上の詳細は学内学術発表での報告と大学院研究論集への記載で結実している。他に史学専攻内で開催された平成 22 年度史学大学院研究発表会（平成 23 年 2 月 17 日）において「南朝の皇帝と貴族について」と題し今後の研究に関わる劉宋皇帝と貴族の力関係を簡単ながら要点をまとめ、劉宋皇帝の権限の範囲と限界、貴族自体の解釈と分限・任官について史料・先行研究を検証した。

④　研究の課題と発展

今後の研究の課題と発展であるが、対外的視点からの南北朝についての考察が未だ不十分であることが挙げられる。周辺勢力の動静については幾つか研究を進めたが、南北の当事者同士が王朝が交代するごとに相手をどのように認識していたか、また南北それぞれに所属している官僚や人物が個人の見解としてどのように認識していたかなど資料調査から始めているのでその研究に着手することにしている。また貴族と貴族制、王朝体制における皇帝権のあり方、皇帝即位儀礼比較などの問題について調査研究が全面に行き届いていないと自身で感じているので、南朝と北朝の政治軍事体制についての相違点と共通項を見つけ、それらを補完していきたい。また断代史としてではなく通史としてこの 400 年に及ぶ時代の研究を行うことは今後の史学において重要になってくると考える。それは研究者は研究が深くなるほどに視野が狭くなりがちで周りが見えず自分の考えのみに固執して進歩のみられない研究となってしまうからである。広い視野の中で個々の

研究を進めるスタイルをいつまでも初心として持ち続けられればと考えている。この王朝が分裂し乱立し並立するという多難な時代を研究することは安定期といわれる大帝国時代の王朝研究でも役立つため政治史の研究では必須となると思う。なぜなら大小さまざまな形態の王朝でも内政問題や軍事・外交問題は変わらないからである。これまで個々に調べてきた魏晋南北朝における王朝儀礼・政治権力にまつわる事象・事件についても比較・検証・考察と研磨していき、それらを博士論文の一部とし完成へ繋げていかねばならないと考えている。この研究が形となれば史書編纂の諸問題解決のための、歴史著述における正否の判断基準になると考えている。それは現在においても様々な価値判断や政治決断の指針となるはずである。それは歴史（歴史著述）が現代または後世において全ての思考行動原理の教科書の役割も果たすからである。

参考文献（敬称略）

≪書籍≫

岡崎文夫『魏晋南北朝通史　内編』（1989、平凡社東洋文庫）

越智重明『魏晋南朝の人と社会』（研文出版、1985）

川勝義雄『魏晋南北朝』（講談社学術文庫、2003）

川本芳昭『中国の歴史５　中華の拡大と崩壊　魏晋南北朝』

宮川尚志『六朝史研究　政治・社会篇』（平楽寺書店、1992）

内藤湖南『支那史学史』1，2巻（平凡社東洋文庫、1992）

尾形勇『中国古代の「家」と国家―皇帝支配下の秩序構造―』（岩波書店、1979）

宮崎市定『九品官人法の研究』（中公文庫、1997）

西嶋定生『西嶋定生東アジア史論集第１巻　中国古代帝国の秩序構造と農業』（岩波書店、2002）

同『中国古代国家と東アジア世界』（東京大学出版、1983）

渡邉義浩『後漢における「儒教国家」の成立』（汲古書院、2009）

≪論文≫

越智重明「東晋成立に至る過程に就いて」（『東洋学報』、1954）

川合安「元嘉時代後半の文帝親政について―南朝皇帝権力と寒門・寒人―」（『集刊東洋学』第49号、1983）

同「劉裕の革命と南朝貴族制」（『東北大学東洋史論集』第９輯、2003）

矢野主税「東晋初頭政権の性格の一考察」（『長崎大学学芸学部社会科学論叢』、1964）